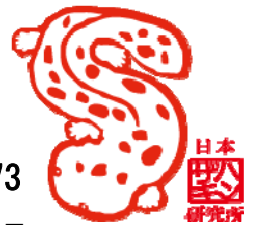


日本

ハンザキ研究所ニュース 2012(1) : 通巻 No. 73



発行2012年1月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

黒主の子供たちの原状復帰

昨年10月にアンコ淵の黒主が守る巣穴からフッキングした卵塊は重量から約600粒と推定した。10月末から11月にかけて次々と孵化したが数えることはしなかった。孵化までに死亡した卵が約50、孵化後死亡した幼生は10個体ほどだった。産卵巣穴から川の中に分散する時期になったので1月31日にほとんどをアンコ淵に放流した(写真1)。455個体の真っ黒な幼生は水温2~3℃の冷たい川の中へ放されると多くは水底の礫間や落葉の下に潜り込んでいく。しかし、中には下の写真のように頭を上にして垂直な姿勢で流れに乗っていく幼生もいる。流下分散のスタイルだが、やがて落ち葉が溜る位置まで流されて同様に落葉塊の中に潜むのであろう。この時期に水底の落葉を掬い上げて調べると幼生が見つかることから断言していいだろう。



垂直な姿勢で水面に浮いている幼生

これらの幼生たちの行く末は厳しいものがある。1個体のメスが1繁殖期に1回しか産卵しない(多分)のかどうか、毎年産卵するのかどうか(栄養次第だろうが)、何歳くらいまで産卵が可能なのかといったことは分かっていない。1回の産卵数が300~700粒であることは、従来の文献にある400~500卵という範囲から私が確認できた数字で上げた物である。この数字は今後の調査で更に範囲が広がるかもしれない。現在の所1年に平均500粒の産卵があるとして、1個体のメスが生涯に10回産卵すると仮定すると5,000卵産むことになる。この卵から2個体の親が生き残ればハンザキの数はバランスが取れると考えられると、1回分の卵はほとんどが死んでしまうことになる。何年かの内で本当に運の良い個体が数匹生き残っていくことになるのだ。自然の厳しい現実である。



写真1 放流直後の幼生たち



写真2 シカ止めネットも積雪でピンチ



写真3 無人カメラにテンが登場

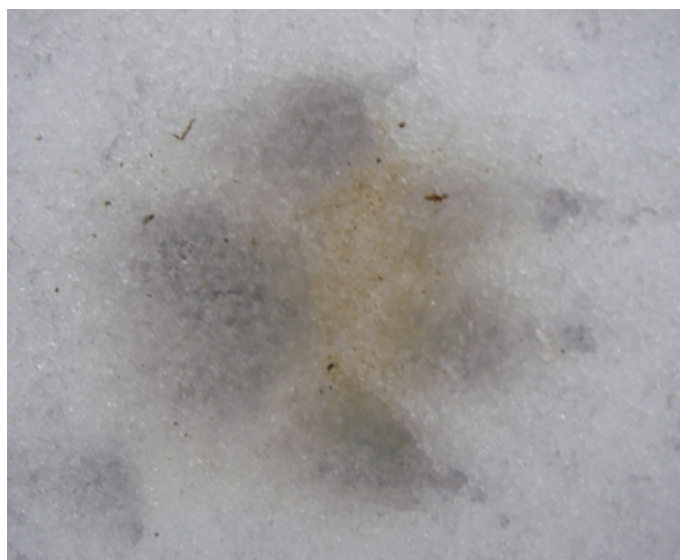


写真4 カメラの側の足跡はテン?

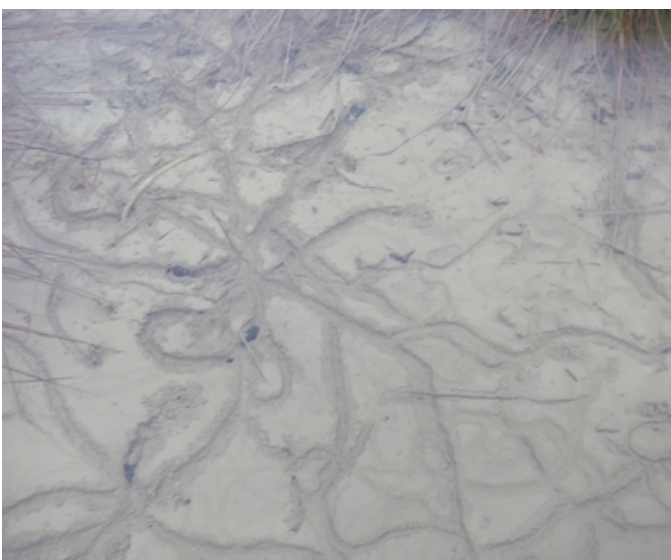


写真5 カワニナの足跡、冬眠しない



写真6 網ですくっただけで粘液を出すハイブリッド



写真7 凍結で爆発したプラナリアは再生するか？



写真8 後頭部の傷

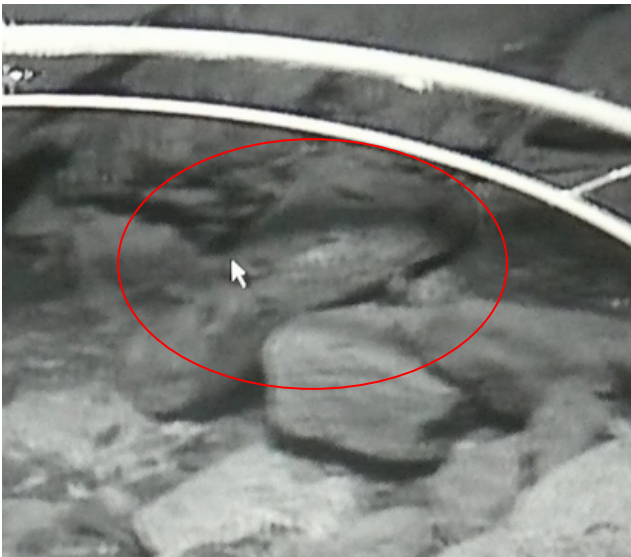


写真9 足の見えない幽霊ハンザキ？



写真10 ペレット・ストーブ (豊岡市役所)



写真11 雪遊びで作ったカマクラ



写真12 歩く範囲の雪掻きがやっとなです

淋しい冬の夜

今年は冬になり辺りが雪に覆われるようになっても天井裏からコトリとも足音が聞こえてこない。ヒメネズミやアカネズミなどの小型のネズミ類の訪れが無いのだ。どうもハンザキ研構内の小ネズミたちは絶滅してしまったのかとも思う。当ニュースNo.60 にネズミとの知恵比べについて書いた。私が来所者に自慢しているトラップに入って死んだり川向うへ放されたりしたことで、周辺にネズミがいなくなってしまったのかと考えている。なにしろ毎年確実に冬になると天井裏で足音が聞こえていたのだから、急になくなったのは私のせいなのだろう。残飯をあさっているテンの姿がカメラに捕らえられた。ネズミもテンの大切な餌動物だったのだろう。残飯といっても台所が出る野菜くずや魚の骨などであるが、ツチガエルのオタマジャクシやカワニナの餌として湿地ビオトープに投じている物である。無人カメラにはハシブトガラスが複数羽同じ画面に映ったりしている。

人類の出現は、最近 400 万年前から 700 万年前と少々早くなったようだが、ハンザキの 3,000 万年前、カブトガニの 3 億年前などに比較すると、ずっと後から地球上に現れた生き物である。出現当初は生態系の一員として隅っこの方で小さくなっていただろうが、今や“自然”に相對する“人工”という立場で自然生態系を破壊し続けている。私は常々こんなことをもっともらしくしゃべっている。しかし、この自然環境の豊かなハンザキ研に一人の人間が入り込んだことは、そこに生息していた多くの動植物にとって脅威となっていることだろう。ヤマビルを初めとしてカメムシ、アブなど多くの害虫（ヒトにとって）を駆除している。ハンザキだって捕獲されマイクロチップを打ち込まれたりしたくないだろう。現在の自然環境をこれ以上劣化させなければ彼らはかつてに生きていくことだろう。小ネズミたちもいい迷惑だと今頃は川向こうで新しい天地に住み着くことができた個体はぼやいていることだろう。

人間は生きていくために多くの他の生物を殺して食べている。ハチやアブ、ハエやカなどの害虫も人に危害を加えるとか不快感から駆除されてしまう。動物愛護精神のおおせいな人々が、動物愛護運動を繰り広げているが、こういったことをどのように解釈しているのだろうか？ また、医学上でも多くの実験動物が彼らとしてはいわれなき虐待を受けているのだ。前号に取り上げた南アフリカの 100 年に及ぶ自然保護の話なども、動物愛護上はどう考えるのだろうか？ ハンザキに深くはまり込んでいるティムさんは肉食主義なのだが、私が見上げるような大きな体を維持して元気に地球上のハンザキ類を追いかけている。日本での食事に困っているのではないかと思うのだが、どうも生き物の目の存在がいけないらしい。なぜならば卵とチーズは食べるのだそうだ。でも、これだって元々には目があるのにと意地悪を言ってしまう。6 歳になった可愛い息子のアラン君も目ごしを食べながらパパにイワシの目玉を見せるのだそうだ。こんなに美味しい物を食べようとしないお父さんの考え方にいたずら心を発揮しているようだ。パパとしては色々な物を食べられるように教育した結果だそうだが。ちょっと愛護精神とは話がそれてしまいました。

子供は風の子

正に子供は風の子だ。孫が雪遊びにやって来た。今年はタツプリ雪があるので大喜びである。バスを待つ間に生野駅前広場でまずは雪投げをしてからやってきた。ハンザキ研に着くやいなや雪だるまやカマクラ作りに励む。雪のシェルターを作って雪合戦が始まる。小学6年生と2年では弟の方は逃げ隠れする一方だ。カマクラの中に逃げ込んで中を掘って広げている(写真 11)。2泊3日の正月休みは雪の降る中でフルに外で遊んでいた。斜面を見つけて滑り台としたり、雪底の切り落としも目新しい遊びとして飛びついてくる。雪掻きも2人で道具を取り合って手伝ってくれた。

長靴の中の足も手袋の中の手も凍えてくるので、休憩してストーブにあたろうといても外で遊んでいる。子供は発熱量が高いのかもしれないが、頬を真っ赤にしながら駆け回っている姿は、ストーブに当たっている私に“子供は風の子”という言葉思い出させてくれた。かくして、3日間孫に付き合っただけで風邪を引いてダウンしました。情けない話ですね。

.....

山椒魚戦争 (1935~1936 年)

このタイトルはオーストリアに属していたチェコの著名な作家カレル・チャペック (1890~1938) の小説である。チャペックは“ロボット (労働)”という言葉を作ったと言われていたが、この小説はチェコ版の他、露版、独版などがあって、更に日本では私のメモだけでも6冊の翻訳が記録されている。角川書店(樹下節、露版)東京創元社(松谷健二、独版)岩波書店(栗栖繼、チェコ版)小学館(小林泰二・大森望)などである。1939年にドイツ軍にチェコとスロバキアが占領されると禁書となったよしである。その理由は、ハンザキをしてナチス・ドイツを暗に指している構成になっているからだという。

小説の内容は、オオサンショウウオを使って真珠貝採りをして大儲けした人物が、真珠貝を取り尽くしては新しい海域を求めて、ハンザキを増やしつつ世界中の海から真珠貝を集め真珠の生産に励んだ。さらに水中工事の労働力や海中武装軍隊として人類が利用していった。横暴な人類に抵抗しつつ莫大な数に増えたサンショウウオは、住処を増やすために陸地を海に変えていかねばならなくなった。そして、次々と陸地を水没させて、最後にはハンザキに地球が占領されるという話である。現実の地球上では、この反対の干拓が行われていることへの皮肉だ。ハンザキが海水中で生きていけるわけは無いのだが、ヴェルヌの海底二万海里にも海水魚たちと共に海底にハンザキの姿があって、欧州の人々には神秘の国の神秘的な生き物というイメージが強いのだろう。また、姿かたちが人間に似ているということは、ヨーロッパで発見された化石が“ノアの洪水”で死んだ人間の骨と言われたことから想像できるだろう。たびたび、ハンザキは赤ちゃんのような鳴き声を発すると言われることがあるが、鳴かない。小説ではツ、ツ、ツと言う音を発しているが、ハンザキが呼吸をする時にはフーツというような呼吸音が聞こえる。

こわーい話

① ハンザキの幽霊

怪談話は蒸し暑い夏に出す物かもしれない。私は最近はおっぱら横着して夜の川を歩かずに毎晩のようにビール片手にパソコンの画面を見ながら夜の川の観察をしている。冬はさすがにアンコ淵の黒主も活動が鈍るようであつたに会うことが無い。その代わり、別のハンザキが姿を見せることもあるがめつたに動く物を見られない。昼間は太陽光線でアンコ淵の環境を見ているが夜になると真上からの照明で別の顔を見せるのだ。淵を形成している岩の凹凸が別の陰影を作るので再々“ハンザキの出現！”と期待して画面を見つめることがある。巣穴の出入り口近くからハンザキそっくりの映像を見つけるが、全く動かない。パソコンのマウスの矢印を鼻先にセットしておくが全く動かない。よくよく見ると足も尾も見えないユーレイだった。(写真9参照)

② 真夜中のダウン

ある朝、起きると枕元近くの畳や掛け布団に点々と血痕がついている。枕カバーにしていたタオルは大きな血斑を作っていた。後頭部が痛いので手を当てると血がついた。手のひらをくぼめた所にスッポリ入るくらいのたんこぶができていた。デジカメで後頭部の写真を撮って観察したら5割くらい切れて出血しているし、頭が痛いし、いくら考えてもどうしたのか思い出せない。起き上がらなければ倒れないので、夜中にトイレに立ったのだろうが、どこで倒れて何に頭を打ったのか分からない(写真8)。お漏らしもしていないので帰り道だったのだろうが、これだけの打撲と外傷があるのだから相当痛かったのではないかと思うのだが記憶が無い。そして、そのまま朝まできちんと布団に入って寝ていたのである。一体どうなっているのだろうか？ 昨年6月に5年ぶりにダウンしたが1回目・2回目とも昼間のことであつた。

③ 除雪・落雪・落石

今年は各地で豪雪というニュースがある。ハンザキ研でも4～5回の雪掻きをした。実際には国道からプールまでの見回りのルートでざっと300mの距離である。腰が痛む、手が冷たくてしびれてくる・・・しかし、長靴が埋まるほどの雪は除かなければならないのだ。結局、写真12のように歩く幅だけをどかしているので笑われる。もっぱら奥藤事務局長の出番を待ち、小型の除雪機で道をつけてもらっている。

屋根に積もった雪も、数日すると凍結してしまう。これが屋根を滑って落下してくるのだ。新聞にも死者が出たとあるが全く危険な存在で、石の塊と同様だ。雪庇が伸びてくると大きなのこぎりで切り落としている。それでも夜中にドサッという音がしたり、ツララが落ちて高い音が出る。崖からは石が落ちてドスンと大きな響きが聞こえる。慣れるとあそこの雪が落ちたなと分かるようになるが、賑やかなことでもある。

冬の話あれこれ

- ① シカ：昨年の 11 月にボランティアの手で整備されたシカ止め金網ネットだが積雪で半分くらい埋まってしまった。念のために、その上部に海苔網ネットを張っておいた（写真 2）のが良かった。これでこの冬はなんとかうまくいくだらう。しかし、例年なら朝の見回り時に必ずとっていいくらい警戒音を発してきたシカの声が聞こえない。昨年は大雪で餌の草が埋もれて木の皮はぎが多かった。それだけ餌不足と言うことで、ハンザキ研周辺で 6 体のシカの白骨を拾ってきたくらいで、かなりの数の餓死が出たようだ。それに、シカの方も餌の植物の残っている地域へ移動したという話もある。
- ② テン：無人カメラを構内のあちこちに 1 か月ごとに変えて置いて何が写るか楽しみにしている。風に揺れる植物や降雪にも反応するので何も移っていないシーンが多い。しかし、1 月のメモリーにはテンが沢山写っていた。もっとも左脇腹に傷があるので同じ個体ようだ。（写真 3・4）この冬は雪の上にテンとノウサギ（亜種キュウシュウノウサギ）の足跡が多く見られる。まだ写真が無いのはイタチくらいだろうか。
- ③ カワニナ：あまり気にしていなかったのだが、真冬の池でカワニナが盛んに動き回っている。今までは夏の間だけ台所からの野菜クズを給餌していたが、写真 5 のように池の泥底に沢山の足跡（はいずった跡）があるのに気づいた。ダイコンの葉っぱもよく食べるが、ダイコンそのものも好物？のようだ。夏になればオタマジャクシとの競争になるが、冬はカワニナの天下だ。
- ④ プラナリア：プラナリアは再生の天才だ。理科の授業に必ず出てくる有名な生き物である。扁形動物という平ペッタイ体（写真 7 の円内）をして川の石の裏などで生活している。牛肝のきれっぱしを川に漬けておくと集まってくるので簡単に採集できる。体を 10 にきざむと 10 匹の小さなプラナリアになる。頭部に縦に途中までメスで切れ目を入れておくと双頭の怪物が出現するし、双頭双尾の凄いのも作れる。
- このプラナリアだが中々の悪さをすることが知られている。ハンザキの卵の中に食い入って卵黄を食べてしまうのだ。広島市安佐動物公園では卵塊を丸ごと食われてしまったことがあったという。使っている谷水から水槽に侵入したのだそう。いくら大型のオスでも小さな平らなプラナリアを撃退することはできない。私も、カスミサンショウウオの卵のうの中に入って卵黄を食い荒らしているプラナリアを見つけたことがあったが、卵が数粒しか残っていなかった。昨年 10 月にアンコ淵からフッキングしたハンザキの卵塊にも 20 匹くらいのプラナリアが付いていたようだ。水槽に移してから 50 卵ほどが死んだが、プラナリアにやられた可能性がある。食っている現場を見てはいないが、水槽のガラス面を這い回っているのを見つけて隔離したことで存在そのものは確認できた。このプラナリアをトレイに入れて放置しておいた所、水が凍ったためだろう体が破裂してしまった（写真 7）。さて、粉々に爆発したプラナリアは再生するのだろうか。再生したら恐ろしいことだが・・・・

ハンザキ研日誌

2012年1月

- 元旦 5年続けて山中で一人越年、静かである
- 4日 雪掻き②、300[㊦]は中々きつい
- 6日 デマンド・バスで食料調達に
小学生の孫二人、雪遊びに～8日、子供は風の子
- 8日 NPO事務局会議、7名出席
- 11日 雪掻き③
- 12日 雪掻き④
- 20日 円山川水系自然再生推進委員会技術部会へ出席（県豊岡総合庁舎にて）
- 24日 ・雪掻き⑤
・午後、12月20日以来の下山
- 25日 ・内科医院にて診察、風邪薬と高血圧薬補充
・資材調達
- 26日 兵庫県立福崎高校にて特別授業の後、帰所はビールと共に配達していただく
- 27日 今冬の最低気温-8℃を記録
- 29日 ハンザキ研ニュースNo.72（12月号）印刷へ
- 31日 450匹の赤ちゃんハンザキ放流（写真1）

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

カモガワ・ハンザキの幼生を2匹飼育している。現在2歳と3歳であるが、2匹とも日本産の5歳の幼生よりも大きい。そして3歳の方は鰓孔もふさがって変態が終わっている。まあ、日本産のハンザキでも3年で変態終了としている報告もあるので、餌が十分に早く大きくなれば5年掛からずに変態するのだろう。このカモガワ・ハンザキの幼体を捕まえて、鰓孔の無くなっている事を確認しようと網ですくってみた。掬い上げただけで全身から白い粘液を分泌したのには驚いた（写真6）。今までも水槽掃除の時などに何回もすくっているのだが気付かなかった。その粘液の状態も日本産に近い感じがするし、DNA鑑定ではハイブリッドとされているが、成長にしたがって斑紋が日本産的なものになってきた。このまま大きくなっていったならば、将来は日本産と見られてしまうかもしれない。

豊岡市は中貝市長を先頭に色々な試みをどんどん進めている。市役所の玄関でペレット・ストーブが焚かれていた。杉桧の間伐材や製材残片を細かく砕いてペレット状にした物（写真10）で、中々の火力で暖かかった。本当に山の中には放置されたままの間伐材が多く、豪雨の際にはこれが流されて川の中で大暴れする。搬出する労力不足や経費がないなどの理由でほったらかしになっているのだ。行政が先頭になってこれらの問題を解決するべく努力することは素晴らしい。